

東京納税貯蓄組合総連合会会長賞

「私の『当たり前』を作る税金」

三年 坂本 舞衣

私の考える「当たり前」とは、学校に行って、帰る家がある。遊びたくなったら公園に行き、体調が悪くなったら病院を受診し、本が読みたくなったら図書館に行く。そんな生活だ。この作文を書くにあたって調べていくうちに私の「当たり前」を作るには何かしらの形で税が関わっていることを知った。

日本には多くの観光客が訪れる。これは、全国的に道路や橋が整備されていて移動しやすく、安全に楽しく旅行することができるからだと思う。その上、日常の中で当たり前に使っている公共施設は常に清潔が保たれている。トイレもきれいで、入ることに躊躇することもない。

また、医療の分野にも社会保障という形でたくさん税金が使われている。この税金に助けられたことだ。九年前、私は喘息の発作がひどく、入院した。毎日の点滴に、毎日服用しなければならぬ何種類もの薬。加えて一日三食の食事。このサービスを受けるのならば本来、大金を支払わなければならぬ。しかし、私の住む足立区には子ども医療費助成制度（マル乳・マル子・マル青医療証）があった。これは、出生してから十八才に達する以後の三月三十一日まで区が医療費を助成してくれるというものだ。この制度のおかげで、入院に

関して支払うお金はほとんど0円だった。退院してからの通院代や定期健診代も、もちろん0円だ。通院の頻度も減ったとはいえ、二ヶ月に一回の定期健診と毎月もらう薬のことを考えたら決して安い金額ではない。だから私は、この医療費助成制度にとっても感謝している。税金について学ぶ前は家族や看護師さんだけが私を支えてくれていたと思うけど、納税してくれている方たちにも支えてもらっていることを知れた。

こうして振り返ってみると税金は正しい使われ方をして、私の「当たり前」を作ってくれているのだ。よく、「税金をとられた」と税金に対してマイナスな言葉を耳にする。私も思ったことがある。しかし、その考えは間違いだった。私の「当たり前」を作る税金はとられるものではない。国民全員を幸せに、快適に過ごさせてくれる、納めるべきものだ。

今は税金によって支えてもらっている立場だが、納税者の立場となった時「当たり前」の重みを理解し、誰かの「当たり前」を支えられるようになりたい。